

発題 自然といふこと (第二部)

「自然の死」と自然

上田 閑照

人間として生きること、**「生命」生（生活／人生）**—いのち」の連関を生きることと見て、現在、この基本的連関に大きな狂いが生じているのではないかと見ました。現在の危機的な問題の根本様相は、この連関に於ける一分肢の、しかも一側面にすぎない「生活」の異常な肥大増殖によって、生命（他の生命との生命的繋がりを含めて）が破壊され、否定の非連続を通して生きられる「いのち」への道が塞がれていることと見定めることが出来ると思います。言い換えれば「生命—生（生活／人生）—いのち」の生ける全連関における「生活」の文字通りの癌化と言うことが出来るでしょう。その顕著な現象は「自然が死につつまる」と

繰り返し言われているところに集約的に見られると思います。「自然は蘇るか」と真剣に問われています。これが現在「自然」ということが言われる場合の差し迫った問題事態であり、それは同時に人間自身の危機的な問題事態として感じられています。一体これはどのような問題事態であるのか、自覚が迫られています。

人類の経験の歴史と思想の歴史においては様々な「自然」理解が現れています。それは、存在するもの全体の連関をどう理解するか、その理解を構成する分肢であるだけでなく、全連関のうちにある人間の自覚の表現でもあります。このような全脈絡からして、個々の事象をこえて総体としての自然が「死につつまる」

と感じられるとすれば、そして「科学的調査」によって確認されさえもするとすれば、何が起っているのか。自然が「死につつある」と感じられるとき、そのもとには、失われつつあるものとしての「生ける自然」という経験、自然の見方がある筈です。あった筈です。そして「自然が死につつある」のは、自然が自然に死につつあるのではなくて、自然を死なしめつつあるものがあるということです。

「生ける自然」の生命性は様々な仕方でも経験され思想的に理解されて来ましたが、その代表として“*natura naturans*”（能産的産出的自然）という見方を挙げることでできるでしょう。最も具体的に決定的な「生ける」徴が「産む」ことに見られるからです。自然は実に豊かに様々なものを産みだしてきました。産みだされたもの（所産的自然）をも含めて自然であるわけですが、自然の生命性はあくまで産みだすところにあり、それも、産みだされたものがそれ自身また産みだすことができるような、そういうものを産みだすところに自然の根源的産出力があります。人間も人類という種とし

ては産出力を産みつけられて自然に産みだされたものです。しかし人間は自然のままではない何か特殊な在り方をしています。問題の決め手はここにかかっています。自然に沿って、人間の特殊性——自然から産まれながら自然に背くに至るまでの特殊性を生物の種としての人間の在り方から説明し得る最も単純にして基礎的な見方が、動物学者A・ポルトマンによって提出されています（岩波新書『人間はどこまで動物か』）。

ポルトマンは厳密に直立姿勢を、哺乳動物のうちで形態学上人間という種にのみ特有なものとして強調し、この直立姿勢と、すでにM・シエラーが提出していた人間に固有な、環境 *die Umwelt* と質的に区別された「世界の開け、世界開放性」(*die Weltoffenheit*)とを結びつけることによって、人間の、動物としての形態上の特色からして動物であって同時に動物でない質における独特な存在を理解しようとしています。「動物の行動は、環境に制約拘束され、本能によって保証されていますが、直立することによって環境から抜け出た人間の行動は、「世界に開かれ、そして決断の自由

をもつて」います。人間が直立したのではなくて、直立するように自然に産みだされた動物が直立によって単に動物ではない人間になったということです。直立によって環境を超えた「開け」が開かれ、この「開け」の中で人間として周りの世界（周界）を自分の必要や要求や希望によって構想し、その構想に従って、直立して自由になった手をもつて環境に手を加えつつ世界に形成してゆく、このような仕方です。生を営むわけです。その際、環境を単に変形してゆくだけでなく、環境から自然の素材を得て自然にはないものをつくりだして世界を豊かに形成してゆきます。基礎的にして広い意味で「文化」という在り方です。人間といえども、生物の種としてはそれに相応する環境なしには生きられないわけですが、人間の環境は世界によって上塗りされています。むしろ環境も「環境」という意味をもつた場所として世界のなかにこめられています。

以上のことは基礎的な人間学的認識が、「自然が死につつある」と言わざるを得ない現在、あらためて見直してみたいと思います。現在になって初めて人類共通

の経験のなかに入ってきた危機的な問題への省察からすると、人間学的優位とされてきた直立及びそれと連動する「世界の開け」、即ちに人間存在成立の原初に起こった単純なことのなかに、初めから大きな問題があったのではないかと深刻に考えざるをえません。ポルトマンは直立と「世界の開け」を結びつけ、それによって人間における動物との連続性と質的な非連続性とを理解しました。しかし今になって見ますと、直立とともに生起していたもう一つの特別な事態、即ちそのようにして開かれた世界の中心に自らを置く（自分が立っているところを世界の中心にする）という自己中心性が、人間になった存在の在り方として大寫しに出てきます。自己中心はさしあたって世界における定位の座標軸ですが、同時に自我中心（人類的には集合的「我意」、例えば自然に対する人間中心主義）の拠点でもあり、そのようなものとして初めから大きく問題的事態であったはずで、「自然が死につつある」現在の事態は、この後者の殆ど暴走的と言っていいほどの発動と

無関係ではないと思います。

ところで、初めから暴走へと定められていたのではなく、どこかで歯止めがなくなつたという事態と考えられます。もう一度、直立に戻ってみます。直立によつて開かれた世界における自己中心性は自我性の拠点にもなりますが、実は、直立そのものはその原初においては自我性への否定の可能性をも伴っていたと見ることができます。即ち、直立によつて動物界を抜け出て人間になつたその人間には直立という垂直の運動感覚によつて、同時に、自分を超えた高みへの感覚（「高きにまします、或いは天にまします神」というような宗教の言葉が出てくるもとにあるセンス）、乃至、立ち上がる垂直の運動のうちで反作用的に深み、単なる環境を超えた大地の深さへのセンスが与えられていたと思います。直立の原初にはそのようなセンスが生きていたのでしょう。大局的にみると人類の歴史の初期は宗教と言われる在り方が人間の営みを導いていたことは事実です。直立とともに世界が開かれ、世界における自己中心性という位置も定まりましたが、そのとき

自己中心性に巣くう自我性を否定する可能性も同時に直立のうちにはこめられていたと見られるということ、これがポイントです。暴走と言つたのはこの否定の可能性の埋没と決定的に係していると思います。

このポイントは、人間存在に核心的な「世界の開け」のところで見ますと、次のように成るでしょう。即ち、直立によつて単なる環境を抜け超えた「開け」が開かれますが、そのとき人間がそこに於いてある「開け」は元来二重になっています。直立とともに「限りのない開け」が開かれ、同時にその「限りのない開け」のうち、直立した人間の自己中心性による座標軸をめぐつての（人間を中心にしてぐるつと円を描いたこと）に「限りのある開け」（周界）が成立します。後者が世界といわれる場所（人間の営みとしての意味投企と意味充実の場所である世界）であり、前者はその人間の世界が於いてある「限りのない開け」です。このように直立して人間が存在する場所が二重になっているというこのことは、決定的な意義をもっていると思います。世界の内では例えば山は山であつて人間はそれ

を山として扱うことができますが（現在ならば、トンネルを掘るところではなく、山の形を変え、邪魔ならば削って無くしてしまつぐらいのことは平気でする程の土木技術です）、同時に、世界の内の山であつても、世界が於いてある限りない開けからの奥行きをもって世界に現れたものとして人間からは勝手に出来ないもの（宗教の言葉を借りて言えば例えば「神の住みたまう山」）として経験されます。このようにして世界に於ける人間の自己中心性は限りない開けの脱中心的な無限球のうちで相対化されています。それによって自己中心性に巣くう自我性の発動も制限されています。ここで一足飛びに言いますと、人間の世界において「自然が死につつある」事態にいたるのは、大局的には、人間が自己関心による世界内の営みに没頭して、世界が於いてある「限りない開け」を世界の内から感じられなくなり、存在の場所が世界だけになったこと、従つて世界における人間の自己中心性が相対化されず、自我性の発動に歯止めがからなくなつたことに由来すると見ていいでしょう。世界が世界だけになるのが

近世から現代への趨勢であり、「自然が死につつある」事態もそのような世界において起こつてきたことにはほかなりません。

シェーラーの「世界開放性」に続いて、人間に固有な世界構造を初期ハイデッガーが綿密に分析していることはよく知られていますが、そのハイデッガーが後期になつて、世界が彼独特の術語で言う「das Geschickliche」に変質してしまつていることを見極めていきます。これは訳しにくい言葉ですが、造られ組み立て尽くされた世界——もはや世界とは言えない「集立」界、「組立界」という意味でしょう。人間の営む世界の中で「自然が死につつある」その世界は、まさに「存在忘却」の極みの具現でもあるこの集立界にはかなりません。

「世界」を分析したハイデッガー初期の思索と、後期に「集立」界を問題にする思索と、その間には、彼自身が *die Kehre* 「転回」と言う程の思索の変動があります。しかしハイデッガーが思索した事柄に沿つて見ますと、「世界」から「集立」界へは一直線の進行であるとなることが出来ると思ひます。人間存在の基礎構造

を「世界―内―存在」と規定する初期ハイデッガーの世界分析においては、意味連関の総体としての世界の要に人間が在り、その人間のために人間をめぐってその都度の「…のために」の連関において在る「世界の内に存在するもの」はその存在性格からして「道具」と名付けられています。このように分析された人間のあり方そのものが、そこから集立界への世界の変質は絶えず加速しながらの一直線の進行だったのではないかということ示唆しています。集立という在り方が未期的問題であるとすれば、「世界―内―存在」として分析されたときの人間と世界の在り方に既にその由来があると考えることが出来ると思います。

ところで非常に特色的なことと思われませんが、集立界を見るようになったまさにその時期にハイデッガーはまた、そのネガとしてであるかのように、神話的とも評される「四方界」(das Gericht)、即ち「神的なるものたち」と「死を能くし得るものたち(死すべきものである人間たち)」と天と地の四者が相互に映じ合っている四方界を単に人間的ではない、単に人間のため

ではない真実の世界として思索しています。筋道を際立てるために短格的にまとめみますと、『存在と時間』では単に「世界」として分析されたものが、後期ハイデッガーでは世界現実としての集立界と真の世界イメージとしての四方界との二重になっていると言えます。そうであるならばこの二重性に関して、ハイデッガーが後になって集立界へのネガのように提出する四方界を初めから世界分析の際に考え合わせることに「四方界」という世界イメージのままではなく、そのような世界イメージが出されてくる所以を初めから含んで世界を二重に見ることが可能ではないか。というよりも、世界とは元来そのように二重になっているのではないかと思われまます。

世界の見えない二重性については「直立」という人間の根本条件との結びつきで既に一度触れましたが、人間存在の問題を考える際の核心的なことと思われまますので、ここであらためて考察することにします。場所的存在としての人間にとっての包括的意味空間(諸意味連関の総体)としての世界は連関の纏まり、「意味

の総枠」という性格の故に「限り」があります。世界は世界として有限であり、有限であるそのことにおいて、「限らない開け」の内にあります。世界には限らない余白があり、世界を張り渡している諸意味連関には底なき行間があります。即ち世界は見えない仕方でも二重になっているわけです。世界は、そこであらゆる物事に人間が出会い関わる「地平」として世界地平とも言われますが、世界の見えない二重性はこの「地平」現象によって理解しやすくなるでしょう。地平には必ず「地平の彼方」があります。彼方のない地平はありません。通常は見える地平と地平のこちら側だけが問題になりますが、地平のこちら側の意味の場所（世界）は見えない「地平の彼方」から超え包まれています。世界地平はほんとうは「地平と、地平の彼方」という見えない二重性をなしています。これがまた「深みの次元」になります。ごく単純に纏めると、世界は世界として限らない開けに於いてあるということとです。それと連動して世界の内にある主体も、ただ「我」と言う自己ではなく、世界に於いて同時に限らない開け

（こだけで言えば「我なし」にまで通りつつ、「我は、我ならずして、我」という非自己同一的自覚の自己です。「我ならずして」において他者との交わりも真に可能になり（私と汝」という自覚——西田幾多郎）、親しく物と触れることが可能になります。世界の内で様々なものに「…するためのもの」としてかかわりながら、同時にその「もの」が世界の限らない余白、底なき行間から単に「…するためのもの」ではない「物」として現れ出会ってくるということとです（物来たって我を照らす」——西田幾多郎）。これは、日用の道具でも同時に工芸品でもあり得、また形見（単に「思い出すためのもの」以上）であるという場合を思いますと、予感できることでしょう。

ところで世界の真相をなすこの見えない二重性は、見えないが故に、世界内存在の主体によって見られないということが起こります。そのとき主体は「我は我」と言う、自我性をこめた主体に変質します。差し当たって殆どの場合そうなっています。そのような主体の世界における営みによって世界内の行間は埋

められ、余白の見られない世界枠は固められ、このようにしてハイデッガーの言う集立界になります。そこでは自然は、「人間のために」をめぐる世界の営みによって「素材」自然として徴発され、使い早くされてゆきます。それに対して主体が、世界の内にいると同時に、行間や余白を感じつつ世界を通り抜けて限りなき開けに触れている場合、見えない二重性は何らかの仕方で見える二重性に受肉するということがあります。例えば、世界を超え包む見えない限りなき開けが世界の枠に触れるところで世界の縁取りのようにイメージになつて見えるということが起こります。ハイデッガーの四方界もそのような世界イメージの一つと受け取ることが出来るでしょう。その場合四者のうちの天地とは「原」自然ということだと思えます。そのとき世界は、世界と四方界が重なり浸透しあつた二重性になつていくでしょう。このような二重性が世界の真相です。古典中国の例では、人間の住むところは「人間（じんかん）」すなわち人間世界と「天地」の二重性をなしています。李白の帝の一句に「別に天地の人間に

非ざる有り」とあります。その他、世界とコスモスと二つの言葉を使い分けて言う場合、人間は世界に住みつつ、同時にその世界をも超え包むコスモスのうちに自分を見いだしています。以上、四方界にしても、天地にしても、コスモスにしても、いずれの場合も、世界を超え包む限りなき開けが、世界に接するところで、世界の内に在る主体に（その主体が同時に世界を通り抜けて——その際なんらかの仕方ですべてを受けて、宗教的象徴で極端に言えば「自己に死んで」、限りなき開けに開かれていく限り）現れてくるイメージと言つてことができます。イメージの形がそのままで真実なのでなく（それをそのまま真実だとすると多くの宗教が歴史のなかで陥つた過ちになります）、そのようにイメージが現れて来るように世界の内に在るといふ在り方が真実なのだと思います。その場合には、主体は、世界の内の事は世界の内の事として営み生きながら、世界の内にあつて余白や行間が同時に感じられ、世界にいわば風穴が空けられているように限りなき開けを深

呼吸するというような在り方になるでしょう。

しかし現代の世界現実と人間の在り方はまさにその正反対の事態になってしまっていると言わなければなりません。その合言葉が「自然が死につつまる」でした。ここで「自然が死につつまる」事態をもう少し見極めて見たいと思います。集立界に覆われて「素材」自然が徵発され使用され早くして衰弱死しつつある上に、更に自然を深く傷つける事態があります。人間の造ったものが自然を通さなくなったということ、人間が造ったものを自然が通さなくなったということですが、かつては自然を素材にして作ったものが自然のなかに置かれて、時間の経過とともに再び自然に還ることができました。人間は技術をもって物を作るという仕方です。世界内の営みをしていますから、自然のなかでは初めから不自然です。しかし大きなサイクルで自然に還る可能性のなかで人間と自然とが共生出来てきました。石や木材を素材にしての建築は長いスケールでの時間のうちで自然に戻ります。しかも所謂ルイーンネのように文化の面影を残しながら。ところがコンクリートが

材料として製造され大量に使われるようになってからは質的に違ってきたと建築史の専門家から聞いたことがあります。これは現在起こっていることを理解するための基礎的な手引きになると思います。原理的に言えば、人間が自然を素材にして作るのではなくて、素材そのものを人間が造るという高次の技術が次第に度を高めてきたことによつて、人間の造るものもはや自然を通すことが出来なくなりました。これは近代科学を基礎にした超技術の結果ですが、それだけではなく、地球規模で結びついて殆ど一つの世界システムになりつつある高度産業社会の、より多く造りより多く売ることのみを追求する自己増殖によつて、そうではなくても自然を通すことが出来ないものが殆ど無制限に製造され、それが結局は自然のなかに放置され、自然の異物となつて自然に割つて入り自然を割いてゆきます。身近の例で言えば、もはや自然に分解できないような無量といつてよい程の産業廃棄物が自然を傷めています。人間の造ったものによるオゾン層の破壊の進行はまことに象徴的です。人間は初めから自然の間

題児でしたが、このようなところまで引き起こしてきた今としては自然の鬼子と言わなければならぬでしょう。

人間の作るものへの素材として徴発され尽くして自然が衰弱死しつつある上に、人間が造つたものが自然を引き裂いて絶命させてゆきます。かつてニーチェが「神の死」を宣告したときにはまだ、「われら、神なきもの。恐れなきもの」という自由の自覚が伴い得たわけですが、「自然の死」においては、自然を死なしめてきた人間はそうにはゆかないと思います。有機体としての人間における生理学的異常が様々に確認されています。それに「神の死」もニーチェにおいては能動的ニヒリズムの自由の印でもありましたが、一世紀の経過において神の死んだニヒリズムもまた自由喪失のためなニヒリズムに変質してきました。しかも「ヨーロッパのニヒリズム」であったものが、一つの世界システムの現実化とともに、それと表裏してグローバルな虚無になり、高度産業社会のこれほどの自己増殖もそれと無関係ではなく、その空虚を埋めようとする

虚業とも見られるでしょう。そのようななかでの「自然の死」です。自然を死なしめつつある人間は虚無を盾に取って早くも所謂ヴァーチャル・リアリティなるものを享受しつつあるように見えます。現在言われるヴァーチャル・リアリティは、先に見たような本来の見えない二重性が生きられるときに現実世界を縁取るように現れるイメージとは質的に違ふと思います。極言すれば、存在するものはすべて画面上のことになり、人間の行為はすべてキー・ボード上の操作になるという方向に向かって加速しつつあります。集立界がかかるやかにガラス製に、それだけに人間を揮発させながらグローバルな支配を完成してゆきつつあるようです。

人間に何が起こっているのか。鈴木大拙は人間が「狂う」と言います。戦後間もなく、即ち半世紀前、事態がまだまだこれほどではなかった頃、そして戦後復興の必要を誰も疑うことのできなかった時代、復興の資材として木が猛烈に切られていました。それに対して大拙いわく、「こんなに木を切ると、人間が狂うぞ」と。この言葉を知りましたとき、私はドキツとしまし

た。「こんなに木を切ると」——「事が万事です、それから半世紀経った現在では例えば「こんな狭い日本で年間五〇〇万台も車を造って売ると」です。「人間が狂うぞ」——何がどうなるかを具体的に恐ろしいほど洞察した言葉です。「狂うぞ」。自然破壊とか、自然を破壊すると人間も生きられなくなるとか、それだけでは済まないことを大拙は見ています。それ以上のことが人間に起こり、人間どうしの間に起こり、社会に起こり、狂った災いは動物にも植物にも水にも空気にも及んでゆきます。人間が人間として生きる、そのその最も基本的なところで何か大きな「狂い」が生じていることが実感されます。

狂ったまま進むことは許されないのでしょう。このまま進むならば、百年先、二百年先の結果は見えていまいつか。狂いが鎮められ直される可能性があるのでしようか。可能性があるとすれば、人間存在の根本構造からして、ただ一つ、生(生活/人生)から「いのち」への塞がれた道を切り開く以外にはないでしよう。それは人間存在の初心に帰って、(象徴語で言えば)「貧」

と「死」による自己制御が出来るかどうかにかかっています。そのようなことは可能かどうかと他人事のように関つ性質の問題ではなく、人類の自覚的な意志の問題です。

「生」から「いのち」への道は「自然」に即して見れば、どのようなことになるのか、「生」から「いのち」への道を助けるような「自然」観があるかどうか、もう一度「自然」のところで見てみたいと思います。

これから、「自然」という言葉で人間が受け取ってきた別調子の事態を取り上げるのは、上でみた問題に対する答えになり得るといふ直接の意味においてではなく、私たち人間のあり方を根本的に見直すその省察への手引きとしてです。「こゝで」「自然に」とか「自然さ」と日本語の慣用で言うときの「自然」を取り上げてみます。その原義は「おのずからしか(このように)あり」という「あり方」のことです。しかも、それが「ある」の本来であるといふ含意を伴っています。その意味で、仏教の「真理」概念とも言つべき「如是」(かくのごとし)と同趣旨です。事実「自然」も仏教語と

なつて、よく「自然法爾」ないし「法爾自然」と熟して用いられています。

靈性としての自然と言ってもいいでしょう。「おのずから然り」を動かしがたい「眞実」性において、人間から指一本つけることの出来ない原事実性において示しています。それも、人間がそれにぶつかる壁の如き事実というのではなく、人間の存在そのものをも通っているものとして、人間に固有な不自然さをも透過して人間にとつてもまさに「自然」であるような、意志によつて伏せしめるのではなく、「まさにかくの如し」と人間を真に頷かしめるような原事実性であり、それ以外にはあり得ない眞実です。

そのような仕方では「自然」を受け取り、自然をあらわしていると思われる詩の例をひとつ俳句から引いてみます。「この秋は何で年よる雲に鳥」。よく知られた芭蕉最晩年の句の一つです。元禄七年十月十二日五十一歳でなくなる約半月前の句です。「この秋は何で年よる」——伊賀を出て難波への最後の旅、実際に病んでいた芭蕉は老いを深く感じています。しかも老いは殆

ど突然のように迫ってきます。一筋に風雅の道に身をせめてきた生涯が思われます。そして戻すことの出来ない仕方では感じられる老いにおのずからの全存在的嘆きがこめられています。詩になるのは、下の句「雲に鳥」によつてですが、これが「自然」です。「この秋は何で年よる」——この上五・七文字はおそらく口をつくように嘆くともなく出てきたのでしょう。老の実存そのものが問です。答なき深い嘆きが沈黙せしめます。それに対して下五文字になにをおくか、詩の工夫としては、心をくだいて終日「はらわたをさいた」と言われています。「此の日朝より心をこめて、下五文字に寸々の腸（はらわた）をさかれしなり」（『三冊子』）。そして「雲に鳥」で定まりました。

寸々の腸を裂く苦吟が、この「雲に鳥」でなにかす一つと定まったわけですが、「雲に鳥」は上五七の具象化でもありつつ、質的に非連続に「雲に鳥」です。それは詩として句が定まったというだけでなく、それと一つに、「この秋は何で年よる」が人間としての嘆きをこめたそのままに、「雲に鳥」と「自然で」言われるこ

とによって「自然に」すーっと、「雲に鳥」、即ち、「まさに然り」と受け入れられています。いわば、「雲に鳥」で、「雲に鳥」という解脱になっているとすら言えるユアンスです。

以上見てみました「自然」は、集立界に於ける「自然の死」という現代の差し迫った問題と平仄の合わないような「自然」ですが、現代にどの様な意義をもち得るのか。全く無効なのか、それとも平仄が合わないからこそ、発想の転換への可能性であり得るのか。これは、「自然が死につつある」と認識する人間が何を真に欲するかによって決まってくることだと思えます。ただ、一つ言えることは、「自ら然り」というこの「自然」にはなにか人間の在り方をどこかで鎮める（静める）ところがあるということです。高度産業社会の加度的な自己増殖、集合的自熱の衝動、限りなく駆られるそのような在り方を静めて、「そっか」と目覚めしめるところが「自然」にあると思います。永遠に無我になるというようなことはありません。すーっと一旦どこかで衝動の根が切られる経験をする事、こ

れが大切だと思います。それは個人個人の自覚の問題です。そして、社会の雰囲気を変えられてゆかなければなりません。なにが一体それを阻んでいるのでしょうか。

レスポンス

八木 誠一

第二回目の講演で上田さんは、「自然に」また「おのずから然り」という意味での「自然」について語られた。それは、「生命・生活／人生—いのち」の三者の連関全体が生きられるところに成り立つ。その中心は、生活／人生が「限らない開け」に開かれることである、というようにいわれる。それに対して現代の問題性は、世界内存在としての人間の「生活」の局面が異様に肥大して、「いのち」への通路が失われていることだ、というように語られている。

さて以下のコメントには「風なきに波を起こす」ようなところがあり、また大会の席での私の問題点提示の仕方も拙劣だったので、本稿では、大会でコメントとして述べたことを、やや展開した形でまとめさせていただきたい。つまり、現代において——というより

そもそも人間において——とかく「生活」が「いのち」への通路を失ってゆくことは事実だが、他方、人間（むしろ生物）においては、不自然が自然に転化してゆく（生活がいのちに開かれる）ということがある。この点を考慮するとき、「自然」とは何か、あるいは、現代における科学—技術—経済の三者連携が全体として「いのち」に開かれるとはいかない事態か、という問題が生ずる。むしろ上田さんは、もともと人間においては不自然が自然化されてゆくものなのに、現代ではそれが不可能になっている、といわれるのである。では不自然の自然化とはどういうことか。それをさらに問うために、まず極めて日常的な局面における「生活といのち」の連関を問題にすることができる。

第二のこととして、事態を言語化するについての力（The. Sein）を実存論的カテゴリーと解する。我々はこれを「場所」にまで展開して、場所論的カテゴリーと名付けることができる。しかし他方では「出会い」ということも同様に重要な実存論的カテゴリーである。

これは人格主義的カテゴリーと名付けられよう。さて問題というのは、同じ事態でも人格主義的カテゴリーで語ると、我―汝、語りかけ―応答、さらには「選択―決断―責任」というような面が前に出て、「自然」は後退する。それに対して場所論的カテゴリーで語るときは、自然、おのずから、所与、場合によっては恵み、恩寵というようなことが前面に出る。やや誇張して、また大ざっぱにいうと、新約聖書には両方のカテゴリーがあるのに、ローマを經由した西方のキリスト教は人格主義の一面に偏って、それが現在まで持ち越されている。また比較の問題としては、キリスト教は人格主義的で仏教な場所論的である（といっても、浄土教では人格主義的言語が不可欠の要素である）。新約聖書において両カテゴリーが互換的に現われる例を挙げておく。ヨハネ福音書一七章二〇節以下では、人格主義的言語で、「神がキリストを世に派遣した」といわれるが、それは同時に「神がキリストのなかに、キリストは神になかに」あることである（場所論的）。前者は語られ、信じられる。他方、「キリストにある」信徒は

「実を結ぶ」（ヨハネ一章一八節）。これは恵みによつて「おのずから」成り立つ事態である。実際、「自然」の真には「生活」という人間の営みがある。場所論といつても、ハイデッガーのように世界内存在を「配慮」と捉える場合には、「自然」は出てき難い。世界が「無限の開けにおいてある」とき自然が語られる。これは明らかに上田説の長所だが、「配慮」と「自然」の二重性が現代において閉ざされているとはいかなることか。禅には平常心是道というような言葉があり、腹が減つたら飯を食い、疲れたら寝る、というようなことがいわれる。ここには「生命―生活―いのち」の全連関が語られているわけだが、しかし「腹が減つたら飯を食う」場合と「疲れたら寝る」場合では自我の関与の度合いが違う。後者の場合、自我はすくなくとも積極的かつ直接的には関与しない。眠ろうと努力して眠れるものではないからである。それに対して、前者では、人は何をどうやって食べようかと考えるもので、これは「世界内存在としての生活者」が「配慮する」場面である。大袈裟に言えば「生命」が「生活」化して選

扱と決断と責任を迫られる場面である。独り暮らしをしている私の二、三日前の例だが、冷蔵庫にジャガ芋と玉葱がある。さてどうやって食べようか、肉ジャガにするか、野菜スープにするか、それならキャベツと人参を加えてポトフにするか、ジャガ芋と玉葱と、サワラあるいは真鍋の切り身を炒めて（バターで？サラダオイルで？）スープで煮るか、出し汁で煮るか、それとも白ワインで煮るか、いろいろ考えて、結局炒めたジャガ芋と玉葱と鯛をスープ（ブイヨン）で煮たところ、うまかったとみえて鯛の切り身は猫に半分食われてしまった。

「腹が減ったら飯を食う」のが自然なら、料理という「不自然＝人為」は人間の「自然」のうちである。不自然が自然化されたというべきか。しかしここには、腹が減ってもいないのに時間だから食う、もっぱら栄養補給のために食う、うまいものを贅沢に食う、というような「生活」上の出来事があり、これは常に「自然」から離れる可能性を秘めている。食事は単なる悟性の事柄になり勝ちである。また、「料理」には既に、

科学―技術―経済の三者提携が「いのち」への道を塞ぐという問題性が見え隠れしている。

出会いのカテゴリでは、そもそもカテゴリの性質上、「自然に」が語られにくいといったが、そうでなくとも出会いの場面では、相手があることだから、「自然」がより成り立ちにくいともいえる。上田さんは付録で夫婦喧嘩のことを書いておられるが、夫婦喧嘩なら私にもむろん覚えがある。派手にやっている――また猫の話で恐縮だが――猫が間に割り込んできて、もついい加減にしろよ、といわんばかりにゴロリと寝転ぶのである。すると可笑しくなって、休戦ということに相成る。猫の方が我「と」汝を結ぶ、その「と」に開かれている……。ところで夫婦喧嘩は人間（夫婦）の自然か不自然か。この不自然はいかにして自然化されるのだろうか。

上田さんは「直立するように自然に生み出された」動物が、直立によって単なる動物ではない人間になったことを指摘される。直立は人間の「自然」になった、ともいえようか。するとその自然が自然を破壊する。

人間は直立によって獲得した可能性を生かして文明を創り、自然界も人間界も存亡の危機に立つことになってしまった。上田さんは、これは本当に難しい問題で、社会全体の雰囲気が変わらなければ解けそうもない、ともいわれる。結局、あらゆるレベルでの「不自然の自然化」はなお可能か、可能だとすれば、いかにして可能か、ということが問題なのである。現代の問題は、人間が自閉的になって、個人レベルでも国レベルでも出会いに対して開かれていないことだ、ともいえる。しかし、現代の問題を「自然」という観点から考える限り、これは場所論の事柄である。不自然の自然化といっても、人が直立し、鳥が空を飛ぶ不自然がそれぞれの「自然」となった、という意味での自然化があり、「限り無い開け」に閉ざされて肥大した「生活」（文明・文化）はいかにして再自然化されるか、という意味での自然化がある。

以下は大会のコメントの現場で私が言及しなかったことである。コメントでは言及されていないから、上田さんがそれに答えておられないのは当然である。私

はそれを漠然と感じてはいたのだが、明確に言表できなかった。討論のあとではつきりしてきたことだといえる。それをここに簡単に書くことをお許し願いたい。上田さんは「生命―生活―いのち」という連関を語られるのだが、「生活―生命―いのち」とする方が二重世界論と整合的なのではないか。つまり我々には、身体的生命（身体感覚といってもよい）を通じて「いのち」に触れるところがあるのではないか。私は直接経験に「主―客」直接経験、「我―汝」直接経験、「自我―自己」直接経験の三つの局面があると考えている。それぞれが無限の開けへと開かれているのだが、ここではそれに触れない。問題は、それぞれが身体感覚を伴っていることである。だからこそ直接経験だ、ともいえよう。それは人が身体として（肉体として、ではない）生きることである。現代人は仮想現実（バーチャル・リアリティ）のなかに閉鎖されて、キーボードの操作で――というのは一般に記号を通じて――（現実ではない）仮想現実と関わっている。こうして「自然」を見失っているのは、もちろん「限り無い開け」に対して

閉ざされていることだけでも、それは同時に、現代人が（カント的な意味での）抽象的悟性になりきっていて、全身体として、全身体の間与のもとに感じ、生き、働く経験を失っているということでもある。私が料理や夫婦喧嘩の例を持ち出したのは、そこにはなお身体性と感性が関与しているからで、だからそこには「不自然の自然化」への通路があるう、ということであった。人間は身体として「場所に於て」あり、身体として「出会つ」。この問題は討論には出てこない。しかし、この問題を念頭において討論を読まれる方は、身体論がいわば通奏低音として一貫していることを読み取って下さるのではないか。私の期待である。

討議

司会 八木誠一

八木誠一 人間の自然というふうと言った場合、やはり「我は我」ということをとりこんで、かつそれを「我ならずして我」に解消していくはずなんです、しかしそれは非常に難しい点が多いと思う。それで、ここで上田さんにお聞きしたかったのは、「悩まないものが悩むんですから違うんですよ」と久松先生は言われたが、悩まないものの悩みの中には当然悩むはずのものが悩んでいる悩みが入っているだろうし、しかしその当然悩むものが悩んで、その悩みをひっくりかえして、これが単に人間の自然というものだろうと思うのですが、それがまた現代のわれわれの問題でもあろうと思うんで、どこまで自然が人為をとりこんでいけるのか、悩まないものの悩みはどこまで人為で、どこまで自然なのか、その辺をどういうふうにお考えか、はっきり

しておきたかったです。

上田 閑照 いろいろお出しになったけれど、今最後におっしゃったことから始めます。八木さんは久松先生とは度々面と向かって、ぶつかって徹底的に質問するということを通してつかまえたことがあって、それを問題として出されたと思います。わたくしは必ずしも久松先生の言葉で考える必要はないと思います。むしろ非常に親しい言葉としていつも思い出されるのは、因幡の源左という妙好人の単純な言葉です。「苦があつて苦がないのう」、これで尽きていると思つのです。しかしもう少し人為と自然ということに関して言えば…。

八木 夫婦喧嘩まで自然に入るんですか。

上田 自然という言葉の使い方が基本的に違つところがあるんですよ。わたくしは人間のすることはすべて不自然だと思つ。自然が一番素朴な基礎的な場所ですね。生命／生／いのちでいうと、生命のところですよ。生命の創造的進化による飛躍、ということまで衣食住と

言いましたが、衣食住すべてに人為が入っています。人間が直立して環境を抜け出ると、環境を越えた開けが人間に開かれて、その開けにおいて自分の世界を描き、そして自由になつた手で、環境から素材を得てきて、自分の世界を製作しに行く。人間はその営みの基本のところでも既に不自然だと思つます。だから問題は人間のすることがすべて不自然であるのに、人間はどうして生きられているのかということなんです。これも難しい。そういう不自然をもつ一度解消するような自然のサイクルが自然の中にこめられているとわたしは考えたい。それは単純なモデルで言えば、例えば材木を使って家を建てる、これはとてつもない文化的な営みですね、もちろんそこには *Sorge* があり、*Sorge* の主体は「我」、あるいは「我々」です。そして自然にないものをつくるわけですが、長い時間のスケールで言うと、また廢墟に化して自然に戻るといつのサイクルがある。ところが、例えばコンクリートのように自然に戻らないものを人間がつくり出して材料にするという、人間の建築史の中にある種の画期的なこと

が起こった。材料をも人間がつくり出す、しかも自然にないものをつくり出すから自然には自然に戻らなくなった。ですから問題は、人間のすることはすべて不自然であって、それはある意味で自然の否定だけれども、それを越えて自然に戻す、ひとつの自然の回復力が妥当する範囲があった、というように考えたいと思います。直立ということになって人間の固有な世界が開かれ、開かれた世界の中心に同時に人間が自分を置く。もともとは単に座標軸としての中心なんです、そのうちに自己中心とか人間中心というふうになってしまいます。しかし本来は、立ち上がる運動の中には、自分より高いものへのセンスが同時にこめられていた。また自分を支える大地へのセンスがこめられていた。ですから人類史の上で言うと、比較的古い時代に、現在の言葉で宗教と言われるような人間の生き方が生きていた。人間が自分で勝手にいるんなことをするだけに、より高いもの、あるいは自分を支えるものを強く感じる、ということがあって、そういう感じを形成していく儀礼が遂行されてきたわけですね。ところがだ

んだん人間が手で自分の世界をつくり出していくうちに、ある種の錯覚みたいなものがでてきて、つくり出したものの一種の疑似無限性によって、より高いものとか自分を支えるものへのセンスが失われてくるという事態が起こる。現在は人類史で言うと、そういう時点で到達しているのでしょうか。ただそれで絶望していてもしょうがないので、もともともうかということを考えて、より高いもの、あるいは大地への回復の道がどういうふうに再び見出されるか、ということだと思えますね。これは一挙に社会の状態にはならない。しかし生きているのは社会だけではなくて、やはり個人個人が生きている。社会をとって見ても個人の集合以上でもあるし、個人をとっても社会の単位以上であるのだから、個人というときに、新しく始める原点のようなものがあると思います。そしてこれは単に個人的なことではなくて、やはり人間から人間へという形で伝えられていく道になる。いつも現代を考えると、二重の気持ちが起こるのですね。一つは、もうどうにもならんという感じ、もう一つはそういうことと

別に、実際に知っているあの人この人、現に生きている人もいるし、なくなった人もいるし、そういう個人によってほんとうに感銘を受けるということが現在でもたくさんありますね。そのような個人と個人との関わりが次第にふえていくということによって、社会の勢いが、それによっては変えられないにしても、それが社会の中で人間が生きてゆくことに大きな意味をもってくるように思います。

八木 一口で言ってしまうは、全くそれだけのことなんですけれども、現代の状況に関してみると、それで済ますわけにもいかない。人為というふうに言っているものの中に、人間性の自然を再確認していく道がないと、文化と宗教が完全に分かれてしまう。文化が進めば進むほど、宗教が追いやられる、という一つの事態が生じうるかも知れない。人間はすべて不自然だとおっしゃったその人間の不自然の中の、より高いって言うてもいいし、深いと言ってもいいけれども、そういうものに触れることの中から、人為を人間的な自然

に変えていく、そういうことがどうしてもなくてはいけないんじゃないかなるか。上田さんの言葉で言えば、無限の開けに浸透されていく、そういうことです。

上田 無限の開けに浸透されていくということは、しかし人間の自然ということでは成立しない。それは、昨日からの言い方で言うと、やはり死を通して、いのちに触れるという、そこから初めて人為の直線的な、加速度的な方向も制御される。

八木 人間的というのは動物とは違った意味でより高次の自然というつもりでいったんですけれど…。

上田 しかし、そのためには人間であるということがどこかで否定されるといふことを通さないと…。

八木 一方では木を切らないことが必要だし、同時に、文化というものの中に、文化というものが無限の開けの表現になるような、そういう道を探っていかなければならない。

上田 それは全くそう思います。

(中略)

花岡 自然と不自然の往来は、やはり一瞬一瞬きれてはいますが、永遠に続くんでしょうか。

上田 それは永遠に続きます。高い立場で「完成される」というようなことはないとは思いますが、それはやはり、高い立場があるということであって、人間がすっかり理想的なものになってしまつと、そういうことでは決してないと思う。単なる理想ではなくて、ある仕方で触れるのですが、しかしそこである完成した人間になるというのではない。理想というのはその理想状態が実現されるというように考えるのは空想だと思えます。そうでなくて、自分が触れたところで、何が理想かということがはっきり自覚されてくると同時に、そういう理想をもつということが現実に向向と与えるということ、現実がある仕方と規定していくということに理想の意味があるのだと思います。

(中略)

八木 ぼくが言おうとしたことは、不自然が自然になつていく、そういう点を捉えないと、ただの反文化主義になる危険がある、という意味です。例えば空を飛ぶことが鳥の自然になつていく、そういうことが人間にもある。そこをはっきり押さええないといけないのでは…。

上田 わたしもそう考えます。ただ不自然が自然になるためには、もう少し自然の概念、根本的には自然とということの経験の仕方を変えていかなきゃいけない。超自然ということまで考えないと、人間の自然は自然にならない、そういう事態そのものをどう見るかということ、それが私の問題でした。